次回企画展予告

第16回企画展

特別企画―開館5周年記念

「李朝陶磁500年の美展」

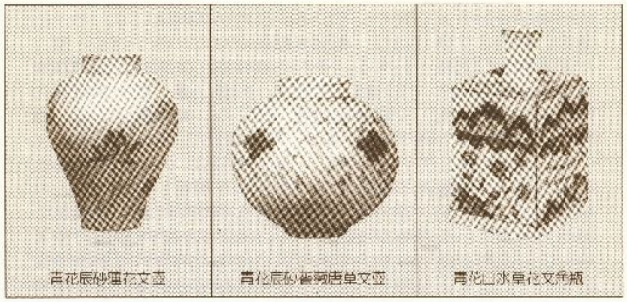
会期：昭和62年10月14日(水)～11月23日(月・祝)

会場：当館第1～6展示室

■「開館5周年記念　李朝陶磁500年の美展」

当館は、本年11月に開館5周年を迎え、それを記念して開館5周年記念「李朝陶磁500年の美展」を開催致します。

この企画は、日本経済新聞社と共催で、館蔵の旧「安宅コレクション」90余点を中心として、館外からもわが国に多く蔵されている李朝陶磁の代表的作例40余点を選りすぐって一堂に展観するもので、海外の文化財に対する日本人の美意識のあり様を辿り、そのすぐれた伝統に対する理解と認識を新たにしようとするものです。また、同展は李朝陶磁の展覧会としては戦後最大級の規模と充実した内容を誇るものです。



お知らせ

第8回講演会を下記の如く開催致します。

日　時：昭和62年11月7日（土）
午後1時半～午後3時半
（受付は午後1時より開始します。）

場　所：中之島中央公会堂3階中集会室

講　師：大阪市立東洋陶磁美術館 館長
伊藤　郁太郎

演　題：「李朝陶磁の魅力」

編集後記

開館5周年記念特別展に美術館は総力をあげて取り組んでいます。どうぞ御期待下さい。なお、今回の特別展は日本経済新聞社との共催ですので、友の会会員の方も同封の**観覧券**が必要です。御来館の際には、**会員証**とこの**観覧券**をお忘れなく御持参下さいますようお願い致します。　（○）

1987年10月5日発行(年4回)Vol.3-2(通巻9号)

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

ASSOCIATES NEWS　No.9

編集　大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
発行　〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏(6)

10月14日から特別企画「李朝陶磁500年の美展」が開かれますので、開催までのプロセスを御紹介しましょう。まず企画を立てたのは昨年春、今年は開館5周年に当りますのでそれを記念する意義あるものをと考えて、当館館蔵品の中でも最も充実した李朝陶磁を取り上げることにしました。大正年間以降、日本に請来された李朝陶磁がどのようなものであったかを振り返り、それに李朝陶磁の歴史をダブらせる試みです。このテーマに沿って出品物を選定しますが、館蔵品以外にも日本には多くの優品が知られています。中には門外不出のものもあり、その交渉のために昨年秋から何度もお願いに上り、今年の夏前にようやく御了解を得たものもあります。何をどのように展示するかが展覧会の質を決定しますので、出品物の選定と出品交渉が第一の山場です。今回は初公開のものが30数点にのぼりますが、候補作よりさらに適当な作品が見つかると、また入換えたりして、最終的に決定したのはようやくこの8月に入ってからでした。第二の山場は、図録の作成です。単に出品物の図版を掲載し、簡単な解説を添えるだけの図録なら、大した困難はありません。しかし何か新しい工夫を加えるとなると、それこそ心血を注ぐ作業が必要になります。今回の図録にはカラー図版が小さいものまで含めて500点以上掲載されています。その撮影だけ考えても並大低のことではないのです。また李朝陶磁に関する古文献資料を拾い上げていますが、研究書から該当する箇所を選びだし、今度はその引用されている文章が間違いないかどうかを原典に当って確認する作業が入ります。膨大な書物からそれを探し出すには時間がかかります。当館の蔵書にない場合には、朝鮮関係の図書が揃っている天理大学図書館まで足を運ばねばなりません。また年表一つ作るにしても、日本で戦後刊行された年表には誤りが多いため、今度は李朝519年にわたって調べ直し、年表を作り変えました。1頁に519年間の李朝・中国・日本の対照年表をすべて収録しましたので、利用する方には便利でしょう。出来上ったものを見ると何でもありませんが、このような作業には長い時間と大きな労力を要します。展覧会の会期が迫ってくると、時間との闘いになり、連日連夜、時には暁方近くまでの作業が続きます。夏から秋にかけては、学芸員にとって最も忙しい季節なのです。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長　伊藤郁太郎

◆第７回講演会要旨◆

「12世紀前半の高麗青磁」

日時：昭和62年7月4日（土）
　　午後1時半～3時半
会場：大阪弁護士会館・6階大会議室
講師：韓国・国光大学校 副教授　尹（ユン）　龍二（ヨンイ）氏

11世紀後半から台頭しはじめた高麗の貴族政治は、12世紀前半の睿宗（1106～1122）、仁宗（1123～1146）年間に確立し、高麗文化はその黄金時代を迎えるに至った。これらの王は文芸を好み官学を振興するかたわら、王宮内に清讌閣、宋文閣など学問研究所を設け大いに文芸を興した。又、礼儀、格式等について儒教的な制度を定め内治にも力を注いだ。三国史記が編纂されたのもこの時期である。一方、李資謙、妙清の内乱に因り高麗の貴族政治が衰えつつあった時期でもあった。この時期に翡色青磁に代表されるすぐれた高麗陶磁が作られている。この間の代表的な陶磁資料として、高麗仁宗元年（宣和５年／1123年）中国・宋の使臣に随行し高麗の都開京に１ケ月間滞在したのち帰国した徐兢が、1124年に著述した見聞録「宣和奉使高麗図経」の記録と、1146年に逝去した仁宗の墓・長陵から出土した遺物の２件がある。

高麗図経　巻第32　器皿の条に

「陶尊　陶器色之青者　覇人謂之翡色　近年以来制作工巧　色浮光仕　酒尊之状如瓜　上有小蓋　而爲荷花伏鴨之形　復能作器楪梧瓢　花瓢瑞瓶　皆緬倣定器制度　故略而不圖　以酒尊異於他器特著之」、

史に、

「陶爐　狻猊出香小翡色也　上有蹲獸　下有仰蓮以承之　諸器惟此物最精絶　其餘則越州古秘色汝州新窯器　大概相類」

とあり、1123年の高麗陶磁は越州古秘色や汝州新窯器に類似していることを指摘しており、近年には製作技法が巧妙になり色も美しくなってきたこと、又、獅子形香爐を指して最も精巧且つ絶妙であること等を記している。

酒尊は現在の瓶に、陶爐は青磁獅子形香爐に似ており、この様な青磁の形は、京畿道長湍郡長道洞に在る仁宗の長陵から「皇統六年銘」のある同土の謚冊と共に出土した青磁瓜形花瓶（Fig.1）、青磁方形台（Fig.2）、青磁鉢形盞、青磁有蓋器（以上国立中央博物館所蔵）等で裏付けられる。

淡い青緑色の翡色釉が均等に施され、深味のある発色は温雅で氷裂がない。胎土は精選されており、器形は端正で適正な比例を保っている。文様が施されることは稀で、高台には丸石床で丁寧に焼かれた跡がある。

Fig.1 青磁瓜形花瓶

Fig.2 青磁方形台

青磁獅子蓋水注（Fig.3）、青磁瓶、青磁托盞、青磁皿（Fig.4）、青磁花形皿（Fig.5）（以上国立中央博物館所蔵）、青磁猿形水滴（Fig.6）、青磁鴨形水滴、青磁両耳花瓶、青磁麒麟香爐、青磁鴛鴦香爐、青磁広口瓶（以上淵松美術館所蔵）などの作例がこの時期の特徴をよく表わしている。これらの陶磁には、若干の陰刻、陽刻の文様があり、器形は厳正がなく、さっぱりと整った理知的且つ温雅と云える。それらは中国・北宋代の景德鎮窯産の青白磁の水注、瓜形瓶、花形皿、托盞、盒、枕、定窯産の梅瓶、盌、鉢、瓶、汝窯産の托盞、鉢、瓶、越州窯産の皿、盒、盌などに類似した例がある。即ち、高麗陶磁がこれらを模倣していることを示唆している。然し、その器形はいささか異なるところがあり、高麗人の嗜好に合ったものを撰択していたことが窺われる。特に皿、盌の高台は定窯産と景德鎮窯産、汝窯産の器皿を倣っている点等が注目される。高台の内底を丸石で支え焼くのは汝窯を倣ったものであり、（このあと典型的な高麗陶磁の作り方としてよく現われてくる。）景德鎮窯産の盌にある傾斜した高台と低い高台の内底の形態は、高麗陶磁の盌にそのまま現われている。亦、定窯の梅瓶、瓶、瓶の器形もこの時期の高麗陶磁に多く見られる。この様な現象は1120年前後から1150年頃にかけての様相であり、11世紀後半の様相が、そのまま12世紀初期までも続いていたことが窺われる。ここで注目すべき事実は、11世紀後半に多くの地方窯が12世紀初めにかけて、康津沙堂里窯と扶安柳川里窯に集約しはじめたことである。12世紀前半には康津と扶安の外に浦南、高敞、公州、瑞山、竜仁、仁川、華山、月城などに生った窯が殆ど消えムっている。おそらく高麗の中央集権化に伴い、代表的な康津と扶安の窯のみを集中的に育成する意図が、この様な現象として起きたのではなかろうか。12世紀前半頃の康津沙堂里窯と扶安柳川里窯は、高麗陶磁を製作した代表的二大中心地であり、以後14世紀後半に至るまで相互競争しつつ製作活動を行っていくのである。何故ならば、現在までの調査では、12世紀以降の器皿の様式の陶片が出た窯址は、この２箇所以外に発見されていないためである。康津と扶安で作られた陶磁は、船便で開京に揚げられ高麗王室、官庁、貴族の用に当てられた。窯址は全て船便に近い海辺に位置しており、陶土や水、木が繁茂している処を背景にしているところに特徴がある。この時期には白磁、黒磁も作っており、その器形は青磁に似たものと察しられる。土器も亦、灰黒色の硬質土器が引き続き作られており鉄絵青磁、鉄彩青磁、堆花青磁等も生産されている。ここで指摘すべき点は、従来高麗図経の記録を過度に拡大、飛躍させて大部分の象形青磁、透彫青磁、陽刻青磁等を12世紀前半に見ていることである。これら陶磁は、器形・文様・釉色などを相互に比較してみると多少異なるところがある。例を挙げると、12世紀前半の確実な遺物である1146年埋葬の仁宗の長陵出土の青磁瓜形花瓶などには、殆ど文様がなく器壁は薄く淡い青緑色の釉がきれいに施されており器形が整っている。ところが1157年高麗王宮内の蓮花亭で使用された康津沙堂里窯出土の青磁瓦（Fig.7）には、陽刻と太い陰刻線で陽刻の感じを出した牡丹唐草文がびっしりと施文されており、釉色は次第に緑色を帯びた青磁釉に変わっている。従って年代が確実なこの二つの陶磁の様相を基準にしてみると、従来の時期設定には不充分な点があることが判明する。例を挙げると、1146年の状態に類似したものとして青磁瓜形瓶、青磁皿、青磁花形皿、青磁托盞、青磁壺、青磁獅子蓋水注（以上国立中央博物館所蔵）、青磁両耳花瓶、青磁麒麟香爐（以上淵松美術館所蔵）と、1157年の青磁瓦に似た釉色と文様をもつ陶磁として、青磁蓮唐草文浄瓶（Fig.8）、青磁牡丹唐草文瓢形水注（以上日本所蔵）、青磁透彫牡丹唐草文枕（Fig.9）（国立中央博物館所蔵）、青磁陰刻雲龍文梅瓶（Fig.10）（米国ボストン美術館所蔵）、青磁陰刻蓮唐草文大盒、青磁陰刻蓮花文酒瓶、青磁陰刻蓮唐草文香盒（以上淵松美術館所蔵）などがある。ところがそれらの焼造時期が殆ど12世紀初期或は12世紀前半と比定している。従ってこの様な点を考慮すると12世紀前半の陶磁は12世紀後半に、即ち仁宗年間（1123～1146）の陶磁は、毅宗年間（1147～1170）に下げるのが妥当であると思う。この時期の有名な青磁鴨形水滴（淵松美術館所蔵）も太い陰刻線で表現した羽や釉色からみて1146年と1157年の中間1150年頃と見られるのではないだろうか。

Fig.3 青磁獅子蓋水注

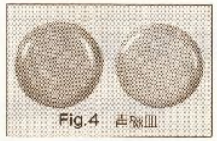


Fig.4 青磁皿

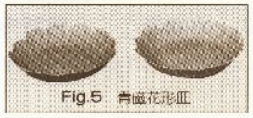


Fig.5 青磁花形皿

Fig.6 青磁猿形水滴

従って1123年の高麗図経の記録に符合する陶磁の有様と1146年長陵から出土した陶磁や、1157年の青磁瓦等を基準作品として分析、比較する作業が非常に重要であると思われる。

10世紀後半から12世紀前半までの高麗陶磁は純青磁が中心になっており、12世紀後半から象嵌技法による青磁が作られはじめ、13、14世紀には象嵌青磁中心の時期というように展開する。最高の純青期というものは、次他へ移りゆく転換の時期でもあり、実際に高麗の貴族政治も10世紀から1170年までの文臣貴族中心から武臣貴族にその支配勢力が移っている。この様な様相が高麗陶磁にも作用し純青磁中心から象嵌青磁中心に変わって現われたと云えるのではないだろうか。

（この後、スライドを使って、個々の作品を通じて詳細な解説がなされました。）

注：写真は下記の著書より転載しました。
「世界陶磁全集」
18（小学館）
（文責：
友の会事務局）

Fig.7 青磁瓦

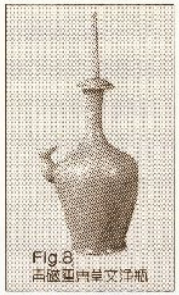


Fig.8 青磁蓮唐草文浄瓶

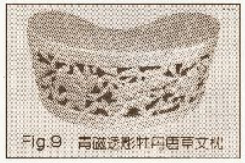


Fig.9 青磁透彫牡丹唐草文枕

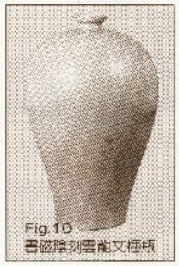


Fig.10 青磁陰刻雲龍文梅瓶

（プロフィール）

尹（ユン）　龍二（ヨンイ）氏

1947年韓国ソウル市生まれ。成均館大学校卒業。1975年から1983年まで韓国国立中央博物館勤務。現在国光大学校国史学科副教授。主な著書・論文に「分院の変遷研究」、「高敞龍溪里青磁調査報告書」、「青磁の変遷研究」ほか。